

補中益気湯 の臨床応用

臨床 § 方 剤

— 症例を中心に —

峯 尚志



補中益気湯は気虚証の 代表処方である



気虚とは

- 身体を維持する生命エネルギーである気が足りない状態。
- 疲れやすく、やる気がでない。風邪などの感染症にかかりやすい。
- 胃腸が弱い場合も多く、食欲がない、たくさん食べれない、食べると眠くなるなどの症状を呈する場合も多い。



気虚証の症状

身体がだるい
疲れやすい
気力がない
動きたがらない
口数が少ない
息切れがする
横になりたがる

昼間眠たく
夜眠りにくい
食欲がない
風邪をひきやすい
下痢傾向



気虚証の所見

- 脈が弱い
- 腹力は虚
- 舌は淡白紅色で胖大
- 薄い白滑苔を少量認める
- 目に力がない
- 疲労感（望診所見）
- 顔色青白く、つやがない。



補中益気湯には、強力に気を
補う人参と黄耆の組み合わせ
がある



人参の働き

- 補気作用
体力の低下、衰弱、疲労を回復する
- 健脾作用
胃腸の機能を回復し心下の痞えを取り除く
- 安神作用
神経衰弱による精神の疲労を回復し、意志を強くする
- 止渴作用
体液の消耗による口渇を止める。



黄耆の働き

- 強壯作用
慢性の疲労、衰弱、内臓下垂、神経麻痺を治す。
- 利水作用
体表の水を取り除く
- 止汗作用
表虚による多汗、盗汗を治す
- 排膿作用
排膿を促進し、肉芽形成を促進する



黄耆の働き（私見）

皮膚の機能の改善

末梢神経を介して、皮膚の緊張度を調節し、漏れ出る汗を止め、利尿に導き、浮腫を去る

皮膚の抵抗性を高めて、排膿や皮膚病の治癒、修復機転を促進する



補気剤には臓腑を補う四君子湯類と
宮衛を調和する桂枝湯類がある
補中益気湯は四君子湯の流れの補気
剤



補氣劑 四君子湯類

四君子湯

人參
白朮
茯苓
大棗
甘草
生薑

+ 黃耆 大四君子湯

+ 陳皮 異功散

+ 陳皮、半夏 六君子湯



補気剤 桂枝湯類

桂枝湯

桂枝
芍薬
甘草
生姜
大枣

+ 黄耆 桂枝加黄耆湯

+ 膠飴 小建中湯

+ 黄耆
黄耆建中湯



補中益氣湯

出典 『内外弁惑論』
『脾胃論』

別名医王湯

金代の李東垣（1180-1251）の創方



4 1 補中益氣湯

人參4.0 黃耆4.0
蒼朮4.0 甘草1.5 生姜0.5 大棗2.0
陳皮2.0
柴胡2.0 升麻1.0
當歸3.0



李東垣 『内外并惑論』序文より

「人の基本が胃の気であることは、水穀の気で生きているからである。……飲食が胃に入ると（全身を循環して健康を維持する）しかし飲食の節度を失うと脾胃に障害を受け諸病を発症する。風寒の邪を外に受けた症状とよく似ているが、脾胃の内傷とは（病理も治法も違うので弁別しないと誤治になる。……内傷の病には）甘温の剤で脾胃の気を補って陽気を昇らせ、甘寒の薬味で陰火を瀉すと治る。『内经』に労と損は温めるといふ。これは脾胃の内傷による大熱には温剤がよいことを言い、これに苦寒の薬で胃を瀉してはならない。それで補中益気湯を創方した。」



補中益気湯の目標

- 疲れやすく、手足がだるい、元気がない
- 声が小さく、目に力がない。
- 寝汗をかく
- 食べると眠くなる。食事の味がない。
- 冷えを嫌う、熱いものを好む。
- 脈は散大、あるいは沈、細で力がない。
- 微熱が続く（気虚発熱）



補中益気湯の臨床応用

気虚証といわれる体力、気力の低下した状態を目標にする

病後の体力低下

抑うつ気分

感染症、特に呼吸器感染

易感染性

MRSA保菌者

寝汗、発汗異常

自律神経失調症など



症例 1 気虚症

70歳、女性、身長153cm、体重42kg。小さいころから身体が弱く、頻回に風邪を引く。疲れやすく、心配性でいろいろなことにくよくよ悩む。食欲はあるが食べると眠くなり、食べ過ぎると動けない。夜はなかなか寝付けない。几帳面で体力以上に動いてしまう。動くとすぐに疲れて少し休むとまた動ける。腰がだるく、顔がむくみやすい。



経過

気虚証を目標に補中益気湯に麻子仁丸を併用し基本処方とする。養生として体力以上に動かないこと、夜更かしをしないこと、少食にし、油もの、甘いものをとり過ぎないこと、暖かいものをとること、夜遅く飲み食いしないことなどを指導する。補中益気湯の投与によって疲れにくくなり、気力がでて日常生活が楽になった。また風邪を引きにくくなり、夜寝付きやすくなったと報告する。



症例 2 うつ状態

55歳、女性。身長155cm、体重49kg。関節痛、朝のこわばりがあり、possible RAとして加療中。経過中16歳の息子が交通事故で突然、亡くなった。それ以来ショックで何をする気力もなく、言葉を発することもできなくなった。表情は暗く、抑うつ的で目は涙でうるんでいる。脈は沈細、舌は暗い淡紅色で、舌質はやや厚く、歯痕を認める。腹力は弱、冷えると頭痛を自覚する。



経過

心因反応による抑うつ状態であり、時間の経過が必要であるが、気力の著しい低下を目標に補中益気湯を与える。胸部不快感や、咽のつまり感にたいして半夏厚朴湯を併用する。処方継続するうちに自殺するのではないかという深刻な抑うつ気分は次第に改善し、半年後には軽い抑うつ気分はあるものの普通に話をし、社会生活がおくれるまで改善している。



症例 3 長く続く微熱

57才、女性。身長165cm、体重63kg。毎年冬になると頻回に風邪をひく。昨年は微熱が続き、時に38度台の発熱をみる。便通は二日に一回。若いころは丈夫だったが、最近は少し作業をしたただけですぐに疲れる。望診にて疲労感著明。脈は沈、細。腹力はやや虚。舌は淡白紅色で薄い白苔がみられる。



経過

抗核抗体陽性、B型、C型肝炎ウイルス検査陰性。肝酵素が上昇しても、貧血が高度に進行しても症状を訴えない。脈は沈、細。腹部は腫脹した肝左葉を3横指ふれるが胸脇苦満がない。声に力はない。発揚性が乏しい。以上の所見から補中益気湯を煎剤で処方。処方後赤血球の低下が上昇に転じ、すみやかに貧血が改善する。以後この処方を7年続け、ステロイドを併用することなくコントロールされている。



症例 5 脱肛、尿失禁

症例は69才、女性。中肉中背。温厚な性格だがくよくよ悩みやすい。腰痛症にて受診、冷え証で手足が冷たいのに少しのぼせる傾向がある。五積散合桂枝加朮附湯にて腰痛は治癒。しかし何か相談したい様子。尋ねると最近尿の漏れが気になる。くしゃみや、咳をするとき、あるいは身に覚えがなくても下着が濡れることがある。また小便をしたくなくなったら我慢できなくなることがある。脈は沈、緩。舌は淡紅色で薄い白体重を認める。腹力はやや弱い。



経過

以上の所見より腹圧性尿失禁、切迫性尿失禁と診断する。肛門のしまりももう一つでしばしば脱肛をおこす。骨盤筋群の筋力低下による中気下陷症と考え補中益気湯を処方する。すると服薬一週間で効果が現れ始め二週間で下着を濡らすことがほとんどなくなった。4週間の服用で脱肛もおこさなくなった。



症例6 発汗異常

46才、男性。身長165cm、体重57kg。主訴は微熱と発汗異常。前年の夏に温冷浴を繰り返してから汗がでなくなった。また風に肌をさらすと37.5℃の微熱が出る。食欲も低下している。入浴すると逆に身体が冷える感じにしんどくてたまらない。脈は沈、細。舌は淡紅色から淡白紅色でやや萎軟。薄い薄苔が少量みられる。腹力は虚で上腹部の腹直筋が緊張している。



経過

自律神経失調症として柴胡桂枝湯を処方し、3ヶ月間の服用で汗が次第に出るようになったと喜んでいる。しかし、今度は汗が出すぎると訴えるようになった。また内風呂では温まらないので銭湯に行っている。11月の外来では毛糸の帽子をかぶり分厚いセーターにウインドブレーカーとジャンパーを重ね着し完全武装している。補中益気湯合桂枝湯に変方。変方後異常に出る汗は改善し、微熱も出なくなった。体重も半年で5 kg増加する。



症例7 アトピー性皮膚炎

48才、女性。身長153cm、体重45kg。もともと皮膚は乾燥傾向だったが4年前、下肢内側に膨隆疹が出現、貨幣状湿疹の診断を受けた。ザジデンの内服とステロイド軟膏を処方されるが湿疹は顔、手足、体幹と全身に広がり、漢方治療を希望して来院。IgE440IU/ml、好酸球20%。脈は沈、弱。舌は紅色で乾燥しており、苔が少ない。亀裂がある。腹部は胸脇部に緊張した感じがあるが腹力は虚。皮膚は浅黒くざらざらしている。便通は二日に一回。生理不順、手足のむくみ感、膝が冷えやすい。顔は皮膚炎のため熱感あり、痒みのため夜間不眠



経過

保健婦の仕事と卒中を起こした父の介護で多忙。全身の倦怠感はあるが生来のまじめさにより仕事の手抜きはできない。舌は赤く陰虚火旺の所見であるが過労による気虚証として補中益気湯合温清飲を処方する。二カ月後顔の赤みもひいて著明改善といえるに至った。父が肺炎で他界した折、一時悪化するが、職場の環境が変わり、5年以上寛解を維持している。1年後IgE675, 好酸球9.3%



症例 8 IgA腎症

40才、女性。身長160cm、体重49kg。色白で痩せた型の女性。主訴は血尿。IgA腎症として加療中。尿蛋白(+)尿中赤血球10-20/1視野。過労時に蛋白(++)と肉眼的血尿になる。疲れやすく気力がない。午後になるとすぐに眠くなるが少し休むと回復する。脈は沈、細。胸肋角は狭く腹力は虚。気虚証として補中益気湯を3年間投与。疲れにくくなり、肉眼的血尿をきたすことはなくなり、尿蛋白(-)赤血球0-5/1視野と尿所見も改善している。



症例 9 脳卒中後遺症

58歳、男性。左視床梗塞、視床出血の既往がある。急性期以降10年来漢方治療を続けている。後遺症により右不全型麻痺がある。当初、構語障害、座位困難があったが現在は歩行可能で職場にも復帰している。発病直後視床痛と思われる右腕の激痛を訴えるが、芍薬甘草湯が著効した。脈は沈、細。腹部はやせ型で腹力は低下している。



経過

リハビリの意欲が低下し対応に苦慮している。卒中前は収縮期血圧が200mmHgを超えることがあったが、現在は120-140と落ち着いている。補中益気湯を投与することによって意欲の改善、ADLの著大な改善をみることができた。四肢の痺れに対して桂枝加朮附湯をアレルギー性鼻炎の併発時には麻黄附子細辛湯を併用して相乗効果が得られている。



症例 10 C型肝炎

71才、女性。主訴は皮膚の掻痒感と全身倦怠感。話し声は弱弱しく。皮膚が乾燥して夜間かゆみのため眠りにくい。脈は沈、弦。血圧は130/80mmHg。補中益気湯合当帰飲子を8年間投与しているが、肝酵素は常時二桁で痒み、疲労感とともに改善し、治療を続けている。食道静脈瘤などの合併症も認めていない



症例 1 1 不明熱

58歳、女性。二週間にわたる38度台の発熱、咳嗽にて受診。頸部リンパ節の腫脹が見られ、EBウイルス、サイトメガロウイルスなどの抗体検査をするも原因が同定できない。抗生物質も無効。軽い肝障害、右中葉の浸潤影を認め、咳嗽とともに喘鳴も認めるようになった。体力を消耗しぐったりしている。脈は沈、弦。腹部は軟弱。



経過

一日3, 4回の下痢がはじまり、真武湯を処方するが有効でない。補中益気湯に変方し、喘鳴に対し神秘湯を併用する。変方後まず体力面で倦怠感が日に日に改善し、胸部陰影が消失、喘鳴も改善した。乾性の咳嗽が発作的に起こる様になったため、補中益気湯に五味子、麦門冬を加えて処方する。この処方で漸次症状が改善し、服用2ヶ月で治癒。



症例12 悪液質

89歳男性、正来健康で慢性脳循環不全によるのぼせ、めまいがあったために大柴胡湯エキス、釣藤散エキスでコントロールしていた。二年目風邪をこじらせて入院。体温38.3℃、WBC8600,CRP6+。咳、痰あり。脈は弦、大。腹部は痩せて薄い板のようである。竹如温胆湯合麻黄附子細辛湯で軽快する。しかし倦怠感がなかなかとれず、気分にもあせりが感じられる。



経過

念のためにおこなった胃内視鏡検査で進行がんが見つかる。病状は改善しているが次第に独語をいうようになり、夜中に歌をうたい、同室者に注意される。これをきっかけに強い抑うつ状態になり、しばしば涙ぐみ、体力気力ともに日増しに低下して衰弱するばかりである。そこで補中益気湯を処方。変方後気力が復活し、倦怠感がなくなり病前の状態まで回復する。その後2年3ヶ月の間入院もせず、毎週自宅から自転車で外来通院を続けている。



楽 まとめ

- 補中益気湯は、疲れやすい、目に力がない、気力がないといった気虚証を目標にすることによって、多彩な病名に対して顕著な効果を発揮する
- 今回その応用を実際の症例をもとに紹介した
- 補中益気湯は、清熱作用を持つ柴胡を含み、微熱が続くものを治し、柴胡、升麻、黄耆の組み合わせは、下陥したものを引き上げる作用があり、軽症の子宮脱、尿漏れなど臓器の下陥証を治し、抑うつ気分といった気分の落ち込みにも効果を示す



- また方中に補血剤である当帰を含み、少量の当帰は血を補うとともに補気作用を強めている
- 西洋医学的には免疫賦活作用、NK細胞の増加作用を持ち、感染予防や病後の体力改善、高齢者の悪液質にも応用される
- その臨床応用の広さは、まさしく医王湯の名にふさわしい名処方といえる

